

大島海洋国際高等学校在り方検討委員会  
(第1回)

平成29年11月20日

東京都教育庁都立学校教育部高等学校教育課

## 第1回 大島海洋国際高等学校在り方検討委員会

場所：都庁第一本庁舎25階 113会議室

【事務局】開会に先立ちまして、大島海洋国際高等学校在り方検討委員会設置要綱第9条に基づき、本日の委員会は公開とさせていただきます。傍聴人の方は合計11名、それから記者の方も1名入っていただいています。

それでは、定刻となりましたので、よろしくお願いいたします。

【出張委員長】それでは、定刻となりましたので、会を進めたいと思います。

本日はお忙しい中ご出席いただきまして、本当にありがとうございます。第1回の大島海洋国際高校在り方検討委員会を開催させていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、私から自己紹介をということで、私、東京都教育庁教育監の出張と申します。この議事の委員長ということで進行させていただければと思いますので、どうぞご協力のほどよろしくお願いいたします。

大島海洋国際高校につきましては、水産業の担い手を育成するという大島南高校を改編いたしまして、海を通して世界を知るという観点の下に、国際感覚の豊かなたくましい人間を育成しようということで、平成18年4月に国際学科である海洋国際科として新たにスタートをしたわけでございます。学科改編後は、実習船につきましては、大島丸でございますが、残しまして、航海実習での国際交流をしております。また、寄宿舎を持っておりますので、自学自習ができる大島の宅習と言っていますけれども、宅習や自立的な寮生活などを通して、学習習慣、規律性、協調性を身に付けさせるなどしまして、実習船と寄宿舎、海洋という恵まれた教育環境を活用した特色ある教育活動を実施してきているところでございます。

改編後、現在11年余りが経過して、現在現場の先生方をはじめとして関係者の不断の努力によりまして、一定の応募倍率を確保することができております。また海洋系大学等への進学実績の向上などの成果なども上げてきている状況がございまして。そうした中、昨今、海洋基本法の制定をはじめとする国を挙げての海洋教育を推進する動きや、もう間もなく改訂されますが、新学習指導要領の改訂など、学校を取り巻く状況が非常に変化しているようなことがございまして。こうした社会的要請や国の動向、都が抱える京浜港の発展、さらには生徒、保護者の本校に対する期待に確実に応えていく必要があると考えているところでございます。

そこで、本委員会では大島海洋国際高校に求められる社会的要請などを分析するとともに、海洋国際高校の現状課題を明らかにいたしまして、生徒、保護者の期待に応えられるような抜本的な見直しの検討を行うことを目的として設置しているわけでございます。委員の皆様には委員を快く承諾していただきまして本当にありがとうございました。是非今の趣旨をご理解いただきまして、忌憚のないご意見を頂戴できればと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひしたいと思ひます。

それでは、事務局の方から最初に本日お配りしております資料の確認をさせていただきたいと思ひます。それでは、事務局のほうからお願ひします。

【事務局】事務局、担当の小川でございます。資料の確認をお願いいたします。まず、A4、1枚検討委員会次第でございます。それから、委員会の席次でございます。その後、設置要綱、両面刷りのものと委員名簿が記載のものでございます。それから、資料1、A3横モノクロ版1枚でございます。それから、資料2、資料2-2とA3横カラー刷りのものでございます。それから、資料3、A3横1枚のものでございます。資料3-2、A4縦カラー刷りの教育課程の変遷でございます。資料3-3、これもカラーでA4縦のものでございます。資料3-4、これはA3横版1枚でございます。それから、資料4と4-2、それぞれA3横1枚ずつでございます。資料5、5-2、それぞれA3横1枚ずつの資料となっております。

以上、ご確認をお願いいたします。

【出張委員長】ただいま事務局の方から説明がありましたが、第1回の次第のところがございます配布資料一覧のところを書いてあるものがあるわけですが、何か足りない方いらっしゃいますか、大丈夫ですか。

それでは、次第に沿いまして会を進めていきたいと思ひます。まず、2番の挨拶及び委員紹介ということでございますので、そこからしたいと思ひます。先ほどの委員名簿が4枚目のところにあると思ひます。それを御覧いただければなと思ひます。順に紹介したいと思ひます。

まず初めに、外部委員といたしまして、東京大学海洋アライアンス特任准教授の丹羽淑博様です。丹羽様は海洋物理学をご専門として研究されておられて、東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センターにおかれまして海洋教育のための教材開発や人材育成に取り組まれておられます。丹羽先生から一言御挨拶をいただければと思ひます。

【丹羽委員】私、東京大学の丹羽と申します。

今ご紹介いただいたように、海洋教育に関わっておりまして、大島海洋国際高校は2013年に沖ノ鳥島の航海で一緒に乗船させていただいたこともございます。今回は拙い経験からうまくコメントができればいいというふうに思います。よろしく申し上げます。

【出張委員長】どうぞよろしく申し上げます。

続きまして、外部委員であります東京都立大島海洋国際高等学校PTA副会長の田島勇希様です。田島様、一言御挨拶をお願いいたします。

【田島委員】田島と申します。よろしく申し上げます。大島海洋国際高校に子供が去年入りました、丸1年半という状況ですけれども、その中でいろいろ経験したこと、またこれからの期待も含めて親の立場でいろいろお話ができればと思いますので、今後ともよろしく申し上げます。

【出張委員長】よろしくをお願いいたします。

続きまして、委員長は先ほど自己紹介しておりますので、私、教育監の出張でございます。司会進行してまいりますので、ご協力のほどよろしくをお願いいたします。

続きまして、本委員会の副委員長でございます、初宿都立学校教育部長です。

【初宿副委員長】改めまして、都立学校教育部長をやらせていただいております初宿と申します。どうぞよろしくをお願いいたします。

お忙しい中本委員会に足を運んでいただきまして、ありがとうございます。日頃大島海洋国際高校のみならず、都教育委員会の教育行政にいろいろ御協力賜りまして、この場をお借りして御礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございます。

大島海洋国際高校につきましては、都立高校において唯一無二の高校でございます。そういったことから私どもほかに多く学校を抱えているわけでございますけれども、唯一ということで行き届く面と行き届かない面があるかと思えます。そういったことを含めまして、この委員会でしっかり議論して、より良い大島海洋国際高校の教育につなげてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくをお願いいたします。

【出張委員長】続きまして、委員であります指導部長の増渕でございます。

【増渕委員】教育庁指導部長の増渕でございます。よろしく申し上げます。

【出張委員長】続きまして、人事部長の江藤です。

【江藤委員】人事部長の江藤でございます。よろしくをお願いいたします。

【出張委員長】それから、委員であります都立大島海洋国際高等学校の山寺校長でございますが、本日は所用のため欠席ということで、代理として鈴木副校長先生が見えております。

【山寺委員代理（鈴木副校長）】副校長の鈴木でございます。本来、山寺が出席の予定でしたけれども、現在、大島丸に乗船中でございます。私の方が出席させていただいております。よろしく願いいたします。

【出張委員長】委員はそこまで、オブザーバーとしてそこに書かれているような方がいますが、時間の都合で省略させていただければと思います。

委員紹介は以上でございます。

続きまして、次第の3番目、議事に入ってまいりたいと思います。議事につきましては、（1）から（5）という形で示されておりますので、まずこの（1）から（4）までを順に事務局の方から説明していただきまして、その後（5）大島海洋国際高校の教育理念等の検討のところで各委員の皆様から御意見を頂戴できればと思っております。

それでは、まず（1）これまでの検討経過について、事務局から説明をお願いします。

【事務局】（1）、資料1を御覧ください。資料1、左側、改編の経緯から御説明をさせていただきます。

冒頭委員長の方からもございましたけれども、大島南高校につきまして水産業、漁業等の中堅人材を育成する学校、主にそういった学校として活躍をしております。ただ課題といたしまして、海運業の合理化であるとかE E Z設定によって遠洋漁業が衰退していったという過去、それから水産の単位が最大で全体の34単位を占めることから、普通教科の単位数が少なく、これによって学力向上が難しいのではないかとというような課題がありまして、また海洋関係への就職者、これについても10.5%に低迷、これによりまして大島南高校と関連の薄い進路選択をする生徒が増加してきたというような課題背景がございました。

これに基づきまして、大島南高等学校学科改編検討委員会というのを設置し検討してまいりまして、先ほど委員長から御説明ありましたとおり、国際学科に改編をいたしまして、18年4月から本校がスタートしている状況でございます。

後々議論に大きく影響すると思っておりますので、基本理念等についておさらいをさせていただきたいと思っております。そこの四角の中にございますが、取組のための基本的な考え方ということで五つ報告書に記載がございます。ここに記載がある内容というのは主に大島海洋国際高校に特化した内容と普通の学校でも言われるような内容とに分かれているかと思っております。

学校像、育てたい生徒像、基本理念、これも同様でございます。例えて言うと、学校像①及び②のあたりについては大島海洋国際高校に大きく特徴が見られる目標だと思います。また、③や④については、これほどこの学校にでもあるべき姿が記載されている。また、⑤、⑥、⑦については、これも大島海洋国際ならではといったところではないかというふうに感じます。

育てたい生徒像、これは①から⑤全部に当てはまると思いますが、教育基本法の考え方、学習指導要領等の中身に合致している内容でございます、大島海洋国際高校に特段大きく特徴のある内容はないかなというふうに思われます。

また、基本理念でございますけれども、これは①と⑤に関しては高校の特徴でもある内容を色濃く反映させております。②、③、④については他校でも、また学習指導要領等の内容にも沿っている内容かと思えます。

これらを踏まえて後ほどの御議論に生かしていただければというふうに考えております。

また、右上、これまでの検討状況について簡単に触れさせていただきます。大島セミナーハウスの移管を平成19年に受けました後に、学校としていろいろな様々な努力をいただいたと、そういった中で、少しずつ課題が明らかになってきていたということがありますので、平成25年度以降様々な検討を重ねてまいりました。検討の内容については時間の都合上お読みいただければというふうに思えます。

このように改編から数年を経過したところで航海実習に関する事など幾つかの検討を重ねてまいりました。一方で、検討されていない課題や新たに顕在化してきた課題、また検討されてきたけれども継続されている課題などが多数存在しています。そのため、多くの検討事項について様々な要請を踏まえつつ解決していく必要がございます。こうしたことから、成果を検証し、社会的背景、生徒・保護者のニーズなどを踏まえまして、学校の理念に立ち返って検証するなど、学校の在り方から抜本的な改革を実施する必要があると考えています。

一番下、検討における議論の視点をご覧ください。そうした考え方に基づきまして、まずは社会的背景や生徒、保護者様のニーズ、また学校の現状課題について成果検証等を行う必要があると思っております。また、そうした内容の確認をいたしまして、新たな検証をしたい。まずは理念や生徒のキャリア像といったところについて大きなところを決めていった上で、検証させていただき、その先に3にありますとおり、昨年度までの検討事項を踏まえながら、さまざまな教育諸条件であるとか教育の内容というのを検討していきたい。教育

の内容に従った教育諸条件の検討という順番になろうかと思えます。

資料1の説明は以上でございます。

【出張委員長】事務局の方から(2)学校の見直しに係るこれまでの検討結果について説明がありました。ここまで何かわからない点とかございますか。よろしいですか。

また随時疑問がありましたら挙手していただいて質問していただければと思います。

それでは、2番目の国の動向や都の施策の状況について、これは資料2ですかね、事務局の方から説明をお願いいたします。

【事務局】続いて資料2及び資料2-2につきまして私の方から御説明させていただきます。

資料2、左上、海洋基本法の制定による国の海洋政策の転換の欄を御覧ください。主に黄色いところを御覧いただければと思います。海洋基本法の制定が平成19年4月になっておりますけれども、このときの課題認識といたしまして、日本の周りの状況として日本が世界第6位の面積を持つEEZを持っているということ。それから、日本の物流が海上輸送依存度99%以上、海洋物流によって日本は成り立っているという状況。それから、当時の数字ですけれども、漁業養殖生産世界第5位というような状況がございます。

また、次の黄色の四角の中ですけれども、海洋環境汚染、水産資源の減少等様々な懸案、課題、問題が発生をしていた。また、その下、食糧、資源・エネルギーの確保、それから物資輸送に必要な問題点、地球環境の維持等様々な問題が背景として浮かび上がってまいりました。

こうした背景や問題を踏まえまして、平成19年4月に海洋基本法が制定されたわけがございますけれども、この基本法の内容を推進するために海洋基本計画というものを5年間で定めるというふうになっています。この海洋基本計画、現在2期目の計画に基づいて事業は進められているわけですが、この海洋基本計画1期、2期、また次の3期の検討についても現在進められている中で、海洋立国日本を支える海洋に関わる人材育成が重要とされています。その内容が右の吹き出しに大体の概要を記載させていただいている状況でございます。

次に、下の段、高等学校学習指導要領の改訂について簡単に触れさせていただきます。これは水産というよりも全体の改訂になりますので、主な点として真ん中の○のところを御覧いただければと思います。ポツ2つ目、教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現。「主体的・対話的で深い学び」の実現、これは「アクティブ・ラーニング」ということだと思います。「カリキュラム・マネジメン

ト」については学校の中でもこれまで様々な検証を行いながらカリキュラムを次の年度次の年度と改訂をしていくような作業をしてきていただいていると聞いております。また「主体的・対話的で深い学び」、「アクティブ・ラーニング」については、水産の教科を学んでいるということもありまして、課題研究、総合実習等で実際にこういう活動をしているというふうに学校さんから伺っております。

また、右側に教科「水産」の教育内容の改善・充実とありますけれども、太字で持続的な発展を担う職業人を育成とありますが、これは農工商等についてもこういう記載がございまして、職業学科についてはこういうことが求められるという記載がございまして、

ここには教科「水産」について六つのポツで記載をさせていただいております。これは国の方のホームページで発表されている内容の抜書きでございますけれども、これら六つの充実策のうち、真に都立の高校として育成すべき生徒のために資する教育を展開することが求められるというふうに考えています。

資料2-2に説明を移らせていただきます。左上、東京都と海洋政策の欄を御覧ください。東京港を含む京浜港、京浜港というのは東京、横浜、川崎の三つの港でございますが、これは国際コンテナ戦略港湾と言いまして、日本で二つだけ指定されている港の一つです。京浜港と阪神港、阪神港は大阪、神戸になります。これはほかにも大きな港はありますけれども、現在大きな港についてはこの2港以外は拠点港ということで呼ばれています。具体的には、パナマ運河を通行するような大きな船、世界の一番大きな商船とかになりますけれども、この水深が14m以上となっていますので、こういった大水深埠頭を整備して、そこから国内の拠点港などへ物流を流していくというようなことを国の方では考えていると。その一つに東京港を含む京浜港が指定されているということでございます。

また、先ほどご説明しましたけれども、その次のところですが、日本は世界第6位のEEZ（排他的経済水域）を持っていますが、そのうちの45%が東京都が保有する伊豆・小笠原諸島の海域となっています。こうしたことから、右側の吹き出しを御覧いただきたいと思いますが、黒ポツで、四つ、四つ、二つと記載しておりますが、様々な職業が求められるということでございます。また、その下の○で、海洋に関する知識を有し、都施策を企画・推進できる人材、これについても必要な人材であるというふうに考えています。

こうしたことから、海洋に関する業種は多岐にわたっておりますけれども、東京港においては国際的な視野を持つ海洋人材を計画的に輩出していく必要があるのではないかと

うに考えてまとめとさせていただきます。

一番下の2行のところですが、日本の海洋政策に大きな影響を与えるものとして、東京都は学習指導要領の改訂の内容、趣旨を踏まえつつ、国際的視野を持つ海洋人材を計画的に育成していく必要があるというふうに事務局の方では考えております。

資料2の説明は以上でございます。

【出張委員長】ただいま海洋教育を取り巻く状況について2枚の資料に基づいて説明を頂きました。国の法律の海洋基本法の制定があったこと、また今後32年に学習指導要領も改訂されていくという中で、海洋教育のことが書かれていること。それから、2枚目の方は東京都の現状という形で、東京湾等の物流を支える大きな役割を持っているんだということで、海洋教育の中で育てる人材などがここに少し出てきていると思っております。

この2枚のところでは何か御質問ございますか。この辺もよろしいですか。先を急いで申しわけないのですが、これもあわせて後ほど御質問ありましたらお願いしたいと思います。

それでは、議事の3番目、都立大島海洋国際高校の成果検証ということで、事務局の方から説明をお願いします。

【事務局】こちらから私の方から御説明させていただきます。

資料3をご覧ください。左上、基本情報ですが、これはもういわずもがなで、伊豆諸島大島に存在する平成18年度に改編された学校でございます。

生徒数等につきましてもこの表記載のとおりですが、右側教員数、常勤職教員のところについては寄宿舎等員を含む数となっております。

また、右側、3、類型の設置でございますけれども、これは平成17年度の改編前の報告書に基づいた記載がございます。事務局からの説明でも御説明をさせていただきましたが、理念等は大きな部分だと考えておりますので、類型の目標の欄、またそれに対して具体的な目指す資格であるとか進路、キャリア像ですね。何が言いたいかというと、キャリア像が大学とか公務員とかというところで終わってしまっている。必要な人材像までは描かれていないのではないかというような懸念を事務局としては思っているところでございます。

4番、成果の検証、下のマトリクスをご覧ください。検証項目として、左側に項目、真ん中に取り組と成果、右側に課題や今後の検討の必要性などについて記載をさせていただきます。

一番上段、教育理念などの検証について御覧ください。これは資料1のところも併せて御

覧いただければと思いますが。基本理念の実現に向けて、学校独自で様々な努力を頂いてきたということについては先ほど御説明させていただいたとおりでございます。現状における課題、学校さんとお話をしている中で浮かび上がってくるものとしては、生徒の将来のキャリア像が明確ではない。あるいは国際科として海洋国際教育をどのように実践すべきかが不明瞭。国際的な人材を育成するということが水産とどう結びつくのかということについて議論をしてきたところでございます。

また、次の段、教育課程の検証、これは資料3-2、次のA4縦のものですけれども、これを一緒に御覧いただければと思います。実際の教育理念と生徒の進路希望などを考慮して、教育課程を少しずつ変更して、学校の中でいろいろカリキュラム・マネジメントを進めていただいたという結果だと思っています。一方で、資料3の右側の欄、社会的背景やニーズを検証して、皆さんの希望を踏まえた真に求められる教育課程というのは何なのかということを検討する必要があります。

資料3-2を御覧いただければと思いますが。大島南高校海洋科時代の教育課程が一番上に記載しております。青が必修、薄い青が選択必修になります。青い必修のところというのは教科「水産」に関する科目です。薄い色のところは教科「水産」以外のものも入っていると。小さくて恐縮ですが、表の下、※2つ目のところに、科目の選択の仕方によっては、普通科目のうちいわゆる5教科と呼ばれるものは33単位で卒業可能となりますけれども、こういうのが課題として上がっていたのだと思われます。

一方、改編後の教育課程編成モデルを御覧いただければと思うんですけれども。これはこのとおりに平成18年4月のカリキュラムが組まれています。見ていただければ一見してお分かりのとおり、教科「水産」に関する科目数というのはかなり減じられている状況です。また、今で言うところの国際系である国際社会系についても、この当時は必修として教科「水産」があったというような状況であるということでございます。今で言うところの海洋系である国際海洋系については、水産に関する科目を最低12単位、3年間で最低12単位というような状況であったということです。

現在、平成27年度生の教育課程を比較として一番下に載せさせていただいております。様々な検証を学校さんの方で行っていただいた結果、第1学年、第2学年、第3学年と海洋系については必修で青の欄、教科「水産」に関する科目について25単位取得するようなカリキュラムになっています。一方で、国際系については選択の仕方によっては2年生以降は

水産に関する科目を学ぶ必要がないというような状況でございます。航海実習等々は1、2、3年とまで続いている中でこういうカリキュラムが生まれているという状況だということを御理解いただければと思います。

戻りまして、資料3、3番目、設置されている類型の検証、これについてもこの資料3の右上のところでお説明させていただいたとおりです。一番右が国際系・海洋系ともに生徒のキャリア像を更に明確にした上で類型を見直しする必要があるのではないかという現状認識でございます。

次に、その下の段、特色ある教育活動の検証ですけれども、当時新しいタイプの国際教育の実践ということで、これ以降は次の検討になるかと思っておりますけれども、一遍にここで御説明させていただきます。

新しいタイプの国際教育の実践ということで、①実習船による国際交流についてですけれども、中段、これまでの取組と成果の欄に記載がありますが、国際系では、航海実習をしながら寄港地活動にて現地の高校生などと国際交流を実施してまいりました。また、海洋系でも同様でございます。海洋系の中では、多くの実習をするなどによって効果の高い実習を行ってまいりました。一方、右側、類型の在り方に合わせた教育課程編成を検討しないと、生徒の具体的なキャリア像につながらないのではないかという懸念を今持っているところです。また、ここに記載はございませんが、現在国際航海には行っておりません。社会情勢等踏まえた上で、北朝鮮情勢等がございますので、現在は行っていない状況です。また、特に国際系なんですけれども、寄港地での国際交流期間が短く、航海が圧倒的に長いということもございまして、そういうところも見直しの視点としては必要ではないかというふうに考えます。

②国際交流活動についてでございます。国際交流活動についても国内における国際港、京浜港や阪神港等での寄港地実習などで様々な体験活動を行っています。また、海外研修で実践的な交流も行っているところです。右側記載の現状課題ですけれども、海外研修について言えば、希望する生徒のみへの実施でございます。これを学校全体でどう還元していくのかなどの課題があると認識しています。

また、③留学生の受入れでございますけれども、報告書当時では1名以上生徒を受け入れるというようなことでやっていくというふうに記載をしていました。一方、現状で見ますと、受入拡大は困難な状況です。受入先との調整が学校だけでは困難であるということに加えまして、予算、施設などの受入環境についても課題であるというふうに認識しています。

2番、進路・進学指導についてですけれども、現在は都が策定しました学力スタンダードに基づきまして学校がまた大島海洋版を作成し、これに基づいて授業、予習・復習、確認テスト、フォローというサイクルを回して定着を図っているところです。一方で、学力定着が進まない生徒がいたりするなど、宅習の効果的な実施方法等について検討することで定着を図っていく必要があるという課題もございます。

3番、全寮制を活用した教育指導の欄がございます。宅習での学習と、それから寄宿舎生活を通した規律性等の育成です。これについては、中段にありますとおり、ハウスマスター、舎監教員等により宅習を実施しているところでございます。また、生徒の代表、プリーフェクトを中心とした自律活動等によりまして、自律性、協調性、生活習慣等を育てているところでございます。右側にありますとおり、一方で、宅習による学習効果が見られない生徒、宅習での学習習慣そのものが身に付いていない生徒などが一部に存在するというような課題もございます。また、生徒への規範意識等、寄宿舎の中でもまだ問題行動等が起こるような状況が続いておりますので、こういう状況も踏まえ、どういうふうにしたらよいかということについて改めて検証していく必要があります。

また、4番、東京海洋大学等との高大連携についてです。当時の概要としてはその三つのポチが記載してあります。現状こちらにいらっしゃっていただいています丹羽先生のいらっしゃいます東京大学海洋アライアンス等との連携を進めてきております。一方で、高大連携はなかなか難しいところがございます。今後は例えば大学教授陣と教員とが連携して教育プログラムを開発実施することなどによりまして、高い志、大学進学やキャリアに向けた志を育成していく必要があるのではないかというような課題も提起されているところでございます。

地域との連携協力についてですけれども、これはいろいろなことが書かれているわけですが、真ん中のところ、島内フィールドワーク等を実践しております。一方で一番右側にございますけれども、地域の課題を捉えるだけではなくて、これをグローバルな視点でリンクさせて、教科横断的に研究する活動など、課題研究等でどんなことができるのか、それ以外の普通教科でどんなことができるのか、連携を学校内、高大、地域、大学等とどうやってできるのかといったことについて課題認識をしているところでございます。

入学者選抜、類型希望、進路の状況等についてでございますけれども、これはデータを見ながら御説明をしたいと思います。資料3-3をご覧ください。

資料3-3、一番上のグラフでございます。応募倍率についてですけれども、大島南は大島南水産科当時だけを抜き出しております。大島南当時の水産科については一定の倍率を保ってまいりましたが、その後改編によって一時低下いたしました。またその後回復をいたしまして、大島丸の運行問題、大島丸が一時運行できなかったあるいは運行延期となったというようなことを踏まえての状況だと思われませんが、その年度に合わせて倍率の低下がありました。現状昨年度はまた増加に転じている状況でございます。

大変恐縮です、グラフの説明が遅れましたが、濃い青が推薦応募の倍率です。水色が一般応募の倍率です。参考までに、破線にて緑が大島南普通科の倍率、紫が大島高校普通科の倍率を載せさせていただいております。

続きまして、中段、第一学年時点での類型希望調査結果についてご説明をいたします。赤が国際系の希望者、青が海洋系の希望者でございます。少し調査の月にばらつきがありますが、1学年のときに2学年でどの類型を選択するかというのを問うたものでございます。見ていただくとお分かりのとおり、青いところが多いのが分かります。年度が増していきますと、未定と答えるものが増えてきている状況でございます。一般的には海洋系の希望者が多い状況ですけれども、大島丸の問題が顕在化したときはこれが拮抗したというような状況がございました。

一番下を御覧ください。類型別の卒業後進路状況推移、進路決定者のみでございますけれども、記載をしております。左が国際系、右が海洋系。緑色に近い色については海洋系とも国際系とも言えないんじゃないかというような進路、青に近い色については海洋系に近い進路ということ。赤に近い色については国際関係に近いということでございます。

国際系の欄を御覧いただきますと、例えば専門学校で言えばアニメや看護といったような進路をとるものが結構多いというような状況だと聞いております。また、国際系のところで特徴的かなと思うのは、国際系に進んでいる生徒の中でも毎年必ず海洋系に進路をとる者がいるということが言えるということだと思います。海洋系については見てすぐお分かりのとおり、学びと関係の深い海洋系に進路をとっている生徒が非常に多いという状況が言えるかということでございます。

続きまして、資料3-4を御覧いただきたいと思います。資料3-4でございますけれども、左側が入学前、入学している生徒に聞いておりますが、入学している生徒、保護者に聞いてある結果で、左側が入学前にどう思っていたか、右側が入学後に実際にどうであるかと

いうことを聞いているものでございます。全体の傾向といたしまして、入学前については航海学習、ドミトリ、寄宿舎の生活が特徴と捉えている生徒・保護者が多いと思われます。また、国際系の各項目については、生徒については関心が余り高くないという状況です。

また、右側の入学後の満足度に関する意識ですけれども、先ほど申し上げました航海学習、それから寄宿舎生活については、航海学習については入学前の興味関心に対して満足度はちょっと低い状況、これは生徒・保護者ともに言えると思います。また、海洋系の生徒につきましても寄宿舎の生活はそれなりに満足がいつている状況なのではないかということがグラフから読み取れるかと思えます、ごめんなさい、保護者ですね、については高いということが言えるのではないかと思います。一方で、国際系の諸関連事項については入学後も興味関心、満足度が低いという状況が見れます。また、学校行事や部活動等については、ここには特に囲み等しておりませんが、かなり入学後に満足度が高い状況にあるというふうに言えると思います。

なお、左上の表にございますとおり、提出状況が生徒についてはかなり高い提出状況になっていますが、保護者については一部提出状況は低い項目もあるということで、グラフの表の数字が生徒については35名、保護者については25名を頭として切っているということをグラフを読み取る際に御考慮ください。

説明は以上でございます。

【出張委員長】資料3、かなり枚数が多くて、4枚ですか、全部で。4枚を元に学校の成果検証という形で報告をいただきました。かなり多岐にわたっていてなかなか追いつかなかった部分もあるのではないかと思います。かなり具体的な生徒の入学前、入学後の状態とか保護者の考えなども入れた具体的な資料を頂いたところです。

学校の方から何か補足とか、ここはちょっと言っておきたいことか、11年間やってきているわけなので、鈴木副校長先生の方から補足があればしてもらえますかね。この資料でもいいですし、資料以外でもいいです。

【山寺委員代理（鈴木副校長）】小川課長からもいろいろ御指摘いただいているところがございますけれども、やはり生徒の将来のキャリア像というところがよく見えてこないというところがございまして、実際に学校の授業であるとか、特に海洋関係の実習、大島丸での乗船実習、そのレベルをどうすればいいのかということに関しては学校の実習船の方でもこの辺の状況がはっきりしないまま11年、12年が過ぎたところがございますので、小川課長に

指摘いただいているようなこのキャリア像というところをこの委員会等でしっかりと確定していただくと学校の方もとても助かるなど思っております。

【出張委員長】今キャリア像のところがちょっとはっきりしないんじゃないかという話で、海洋系のほうもこの10年ぐらいの間で変わりました。昔の大島南のころは一本釣りとかやってたでしょう。

【山寺委員代理（鈴木副校長）】当時はマグロはえ縄。

【出張委員長】はえ縄やってたんですね。その辺は今はやらなくなってるんですね。

【山寺委員代理（鈴木副校長）】そうですね、海洋国際高校になったときからやはり漁業に関するウェイトはかなり下げているところで、もうマグロはえ縄は1期生からやっておりませんで、その機械関係も全部撤去したところでございます。また、船員の方もやはりそういったマグロはえ縄の経験者がかなり減ってきておりますので、実際のところ今はちょっと実施できないというのが現状でございます。

【出張委員長】水産科から国際科、海洋科になっていったところ、そういう面の変化はしてきているわけですがけれども。先ほどの資料なども見ていただいても、国全体の動きも海洋教育をしていくというのが国の方針になってきていますから、そういう面ではある面一致しているのかもしれないですね。その辺の具体なところにどうしていったらいいのか、そのためにはキャリア像が必要ではないかという、そういう話ですね。

かなり資料3は膨大でしたが、ちょっと聞いていてこの辺はもう少し説明がほしいとかというのはいくつかありますか。どうぞ。

【丹羽委員】海洋系で大学行かない生徒で海洋系の進路に進むという生徒はいるんでしょうか。

【出張委員長】ここの紫、ブルーのところ。

【丹羽委員】ブルーのところは大学・短大ですね。

【出張委員長】その上の水色の就職と。

【丹羽委員】これはどういうところに就職するんでしょう。

【事務局】海洋系の大学・短大というのには、説明不足でしたがけれども、海技短期大学校、それから専攻科も含んでいます。専門学校についてはマリン関係の専門学校等でくくっています。就職は就職でございます。

【出張委員長】どういうところに。2人とか5人とか。

【山寺委員代理（鈴木副校長）】就職は毎年本当に一部の生徒でございますけれども、海技免状は本校だけではとれませんけれども、例えばそういう海運会社に甲板員として就職するとか、あるいは数年前は造船所の方に就職をするとか、そういうような就職がございます。

【出張委員長】なるほど、海運に行ったり造船に行ったりしているということなんですね。よろしいですか。

【山寺委員代理（鈴木副校長）】はい。

【出張委員長】ほかに何かございますか。

とりあえずいいですかね、かなり資料が多いので。見ていて気が付いたことあったら御質問いただければと思います。

それでは、次に進めさせていただいて、次が（４）ですね、他県の特徴ある高校の取組ということで、これについて事務局の方から説明をお願いしたいと思います。

【事務局】資料４については川邊の方から、資料５については石田の方から説明をさせていただきます。資料４については、私立の三重県桜丘中学・高等学校、資料５については県立の宮城県気仙沼高等学校でございます。資料４の桜丘中学校については寮による学習によって高い効果を出している私学でございます。県立の宮城県気仙沼高校については、海洋を取り入れた国際教育を実践している学校でございます。

それでは、それぞれの資料を御説明させていただきます。

【出張委員長】資料４について、石田さん。

【事務局】資料４が石田です、資料５が川邊です。

【出張委員長】では資料４の方からお願いします。

【事務局】それでは、他県の特徴ある高校の取組について説明させていただきます。

大島海洋国際高校は寄宿舎を有することが特徴の一つです。そのため寮教育による学力向上などの実績を有する三重県の桜丘中学校・高等学校を視察しましたので、その結果を資料４により御説明します。

資料４、左上の１、学校概要を御覧ください。同校は全日制普通科の中高一貫校であり、図にありますとおり、寮教育をベースとして社会でリーダーシップを発揮できる人材の育成に注力をしている学校です。

次に、その下、２、特色ある取組を御覧ください。学校では授業は30人前後の少人数体制が主で、復習に軸足を置いた指導を行っております。特に寮や授業での学習を定着させるた

め、毎日小テストを実施しています。この学力定着を図るDMTプログラムは同校の寮教育と密接に関わる重要な取組となっております。

続いて、同校の寮教育について御紹介いたします。資料の右側を御覧ください。寮は男子寮2棟、女子寮1棟の計3棟あり、全て学校敷地内に立地しています。ハウスマスターやチューターは全て教員で構成されており、寮の体制としては夕方から夜にかけては3人の教員、夜から翌朝までは1人の教員が配置されています。また、ハウスマスターやチューターの職員住宅も学校敷地内にあり、緊急対応時にはいつでも駆けつけられる体制がとられているとのことです。

1日の寮の生活の流れはウに記載されているとおりですが、特徴としましては、生徒の帰寮が学校内にある食堂での夕食後に統一されているという点が一つあります。同校では生徒全員が放課後に部活動を行うため、夕食以前に帰寮することは原則認めていないということです。また、入浴時間は自習時間の後に設けられており、オン、オフの切り替えがしやすい環境を作っているということです。

寮の学習では自習プログラムが組まれており、自習で使う参考書などがあらかじめ決められています。自習した内容は先ほど紹介したDMTプログラムの一環として、翌朝に小テストを実施することで習熟度を確認し、学力の定着を図っているとのことです。

また、同校は学校行事が盛んであり、生徒が主体となって行事運営をすることで生徒の隠れた才能を発掘する機会としているとのことです。

1枚おめくりいただいて、資料4-2になります。生徒の寮室についてです。写真を見ていただければイメージがわかりやすいのかと思いますが、男子は1部屋16人~18人のブースタイプとなっております。ブースを区分けすることで生徒一人一人の空間が確保されるのと同時に、室内での生徒の様子がうかがいやすいつくりとなっております。女子は4人ごとの少人数部屋となっております。なお、寮室ごとの生徒構成としては、中学生から高校生まで学年の区別なく部屋分けされており、ブラザーシステムといって上級生が下級生のサポートをする仕組みがとられています。

続いて、資料左下の写真についてですが、左側の写真は寮でのサークル活動におけるロボット研究を紹介した写真となっております。右側の写真については、合唱コンクールの写真で、先ほど触れましたけれども、学校行事の一つで寮対抗のイベントとなっているそうです。

最後に、同校が掲げる寮生活の目的と寮別の生徒数について触れたいと思います。同校は

寮を第2の学校ととらえており、冒頭でも紹介しましたがけれども、寮教育は同校のベースとして生徒指導を行う上で大きなウェイトを占めております。全生徒数の約85%もの生徒が寮に所属しており、規則正しい生活の中、学力定着と部活、サークル活動に励んでいます。

以上で寮教育を中心とした桜丘中学校・高等学校の説明を終了いたします。

【出張委員長】続いて、資料5、川邊さんからお願いします。

【事務局】続きまして、宮城県気仙沼高校の取組についてご紹介いたします。

大島海洋国際高校は国際学科の高校として国際感覚豊かなたくましい人間育成を特色の一つとしております。そこで、文部科学省からスーパーグローバルハイスクールとして指定を受けている宮城県気仙沼高校を視察しましたので、その結果を資料5並びに資料5-2により御説明いたします。

まず、スーパーグローバルハイスクールですが、グローバルな社会課題を解決し、様々な国際舞台で活躍できる人材育成に取り組む高校のことで、大学や企業、国際関係機関と連携したカリキュラムを実践している学校でございます。

資料5の左上の1、学校概要、(1)基本的な事項の欄をまず御覧ください。同校は全日制の普通科高校ですけれども、目指す生徒像のところに書いてありますとおり、地域愛と国際的視野を持つ人材育成に取り組んでいる学校でございます。

(2)の沿革の欄を御覧ください。平成28年度に文部科学省からのスーパーグローバルハイスクール、略してSGHと呼びますが、SGHとして指定を受けており、海を素材とするグローバルリテラシーの育成に取り組んでいる学校でございます。

続いて、(3)の教育の特色を御覧ください。このSGHとしての取組を中心に御紹介いたします。まず、アの目的・目標ですが、グローバルリテラシー、いわばグローバルな社会課題に対応するための国際的素養として、思考力、コミュニケーション力と多様性、協働性、行動力という力ということに捉えまして、それらを育てグローバルリーダーを育成しようとしております。

次に、イの学習プログラムのところですが、(ア)協働型学習プログラムと(イ)の東日本大震災復興プログラムの二つのプログラムを走らせて取り組んでおりまして、それらを3つのアプローチから実践をしているところでございます。協働型学習プログラムの大きなポイントとしては、生徒自らの問題意識による探究的な学習で、AL型、つまりアクティブ・ラーニング型、能動型の学習であるということでございます。東日本大震災復興プログラ

ムのほうは、津波などで大きな被害を受けた大震災の経験を通してグローバルな視点を持つスケールの大きな復興の担い手を育成するというものでございます。

続いて、同校の教育内容を詳しく御紹介いたしますので、資料の右側を御覧ください。協働型学習プログラムの一環として、1年生のときに地域社会研究という授業がございます。これは地域の「海」を通して地域の様々な課題や科学的探究の手法をここで学びます。この授業は班別に課題テーマを設定し、フィールドワークなどを行いながら研究内容を班別に発表するというものでございます。

続いて、2年生、3年生においては、1年生のときの内容をより深めた課題研究Ⅰ・Ⅱという授業があります。ここでは取組の課題を地域の課題から世界へと視野を広げて、一人で研究に取組み、論文作成や発表を行うということになっております。

そのほか特色ある教育としまして、(3) 国外交流・異文化理解促進として、英語コンテストですとか台湾や立命館アジア太平洋大学などへの研修を行っております。

さらに、東日本大震災復興プログラムとしましては、防災教育、志教育、地方創生につながる学習などに取り組んでおります。この志教育というものは、宮城県として小学校、中学校、高校の全ての教育として取り組んでいる教育の内容で、社会性や勤労観、集団や社会の中で果たすべき自己の役割を考え、将来の社会人としてより良い生き方を主体的に学んでいくという進路学習のことでございます。

1枚おめくりください。これまでに説明しました内容につきまして、関連資料と写真を載せております。左上はスーパーグローバルハイスクールとしての取組を図で示したものです。海を素材としたグローバルリテラシーの育成に取り組んでいるということがこの図からお分かりいただけるかと思えます。

左下は平成28年度1年生が取り組んだ研究テーマの例としまして、校内で優秀賞と優良賞を受賞した課題研究テーマを掲載しております。このように、海をテーマに、海と産業、海と人間、海の文化、三陸の海、海と防災という五つのテーマに沿って課題研究を行っております。

左側は各取組の状況の写真でございます。一番上は1年生の取組状況で、フィールドワークとして実際に地域に足を運び知見を得ています。そして、研究成果の発表と、成果をポスターとしてまとめております。

次の下の欄は2年生、3年生が行う課題研究の取組状況です。大学の研究室を訪問してい

る様子と中間発表の様子を掲載しております。

次は、国外交流・異文化理解促進の取組状況です。この英語コンテストは生徒にとっては英語の運用能力を発揮する場ということで、また教員にとってはこれまでの英語指導の振り返りと今後の指導の在り方を検討する重要な機会となっているということです。そして、台湾での研修、APU、こちら立命館アジア太平洋大学との研修の様子です。APUの研修では外国人の大学生との交流を通して異文化を理解し、また大学の教授から英語でのプレゼンテーションを学びます。こちらの研修はたった1日で発音、目線、表情が見違えるように向上する研修であるということです。

最後に、課題研究の内容を生徒が学校外で発表している様子を掲載しております。

以上のとおり、宮城県気仙沼高校では海を素材としてグローバル人材育成に取り組んでいる学校で、その主な特色としては、課題学習を通して思考力、コミュニケーション力、他者との協調性などを育成するところにあります。

最初にご説明しましたとおり、次期学習指導要領では主体的、対話的で深い学びを実現するためのアクティブ・ラーニングという視点の重要性がうたわれております。まさにこの宮城県気仙沼高校ではそうした視点に沿った教育活動を実践している学校と言えると思います。

以上が海洋問題を教育に取り入れている気仙沼高校での取組の説明でございます。

ここまでで全ての資料について説明させていただきました。事務局からの説明は以上でございます。

**【出張委員長】** どうもありがとうございます。

今他県の特色ある高校の取組ということで、三重県と宮城県ですか。1枚目の方の桜丘は私学さんなんですね、気仙沼はこれは公立ということで、県立高校ということですね。

**【事務局】** はい。

**【出張委員長】** 桜丘の方は寮生活を中学校から高校まで、6年間一貫でやってるんですかね。それから、気仙沼の方は海洋教育をやっていると、特色ある学校ということで説明がありました。ここで何かご質問とかありますか、大丈夫ですか。

ちょっと教えてほしいんですが、桜丘中学校・高等学校と気仙沼の学級規模ってどのくらいですか。桜丘の方は2枚目のほうに中学生とひとくくりにして、4、5、6と、高1、高2、高3のことを示しているのでしょうか、全体でもそんなにいないような感じですけども、かなり小規模なんですか。

【事務局】三重県の桜丘中学校・高等学校ですけれども、こちらは全体の生徒規模で400名ぐらいと聞いています。ただ、中学校段階で主にとってきて、高校段階では不登校児を転入で入れるというのが主であるというふうに聞いています。

気仙沼の方ですけれども、こちらはすぐ近くにありますが気仙沼西高校と来年合併をするらしいんですけれども、合併したときには1学年8学級規模の学校になるというふうに聞いております。

【出張委員長】はい、分かりました。気仙沼はかなり大きな学校になるんだよね、1学年8学級。桜丘はかなり手厚い教育がされているという感じなんですね、人数が少ないということは。教員の人数とかもあれば、次回でも示してもらおうとイメージが、どこの学校でもすぐに行けるかどうかというのがあると思いますので、是非お願いできればと思います。

それでは、大量の資料の説明が事務局の方からありました。きょうは議事の（5）ですね、大島海洋国際高校の基本理念等の検討という形で、残り時間が30分ぐらいになってしまいましたが、御意見を頂戴できればなと思っております。

まず、事務局から今の中でも話がありました、海洋教育を推進する動きや学習指導要領の改訂、それから国際的視野を持つ海洋人材の育成の必要性などの説明が先ほどあったわけでございます。また、生徒、それから保護者の大島丸の航海実習や寄宿舎生活を魅力に感じて入学している状況などが入学時の資料などにもあったと思います。そういう中で、さきほどの学科を見ていると海洋系はある程度その方向に進んでいるのかなとイメージできたのですが、全体的に生徒のキャリア像が明確ではないため、国際学科としての海洋国際教育がどのように実践すべきか非常に不明瞭になってしまっているのではないかなというような課題が説明されていたのではないかなと思います。

それでは、まず外部委員で御協力いただいております各委員の皆様から、ただいまの説明に対する御意見とか御質問ですね、全般的に頂戴いただければなと思っております。また、こういう機会でございますので、それぞれのお立場から、大島海洋国際高校における教育、それから高校における海洋教育や将来の海洋人材育成に対する期待など、幅広く、今日は第1回目ということでございますので、御提言をいただきたいなと思います。そういうのを受けて、また事務局でまとめて第2回第3回と進めてまいればと思います。今日はざっくばらんにいろいろなお考えを言っていただければなと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

【丹羽委員】まず、自分も数年前に大島丸に生徒さんと一緒に乗船させていただき、そのときにすごく印象的だったのは、私たちの学校は船に全員が乗ってるから学校でははじめがないというようなことを聞いていて、大島丸を生かした実習、海洋教育とドミトリの生活がうまくマッチしていってるんだらうなというような印象は個人的には受けました。

それはそれでいいんですけども、一つやはり思ったのは、実際に大島丸に乗船するなりしたものが具体的にそれが大学進学なりとかそういうものに生きているのかどうかというのがちょっと分からないところがありまして、例えば気仙沼高校の説明がありましたけれども、そこでは実際に生徒が課題を持って、その課題を外部で発表とかして、そういうのも恐らくAO入試とかそういうものの成果になってきていると思うんですね。そういうような取組が大島海洋国際高校で、例えば大島丸に乗船するときに何か生徒自身が課題を持って乗船して、その課題を生徒が乗船後にまとめて外部に発表したりとか、あるいは学会で発表したりとか、そういうような機会を作って、それがまた大学入試につながっていくようなそういううまく海洋教育、乗船実習と、大学入試が全てだとは思いませんけれども、そういう今後の大学入試とうまくつながるような形になるといいなというふうに思います。

あと、寮での自習もうまくそういう大学、例えば課題学習というのは先ほども気仙沼高校の方もグループになってやっているというふうな説明がありましたけれども、うまくグループで寮に戻ってきて、寮の中でグループで課題を一緒にそこで学校時間外でも研究活動みたいなものができるといいのではないのかなというふうに思いました。

【出張委員長】どうもありがとうございます。そうですね、大島丸に乗って、乗船したことがどう生きているのかなという質問も含めてのものかなと思うんですけども。一応私が言うよりも副校長先生とか事務局から言ってもらった方がいいかもしれないんですが。課題研究とかは多分やっていて、そこで子供は自分で課題を設定して学びをするようなことはやっているんじゃないんですかね。

お願いします。

【山寺委員代理（鈴木副校長）】実際に海洋系の3年生のときに課題研究が設定されております。本校が水産系の大学であるとかそれにこだわったものではないんですが、大学に行く手段としてはやはり推薦入試、AOに対応しているところはございまして、特に水産系の場合には課題研究で研究等をしたことをもって入試に挑むというようなシステムになっておりますので、そういった面では活動を今先生がおっしゃっていただいているような形は一部で

きているかなと思います。

ただ、大島丸に乗ったときに課題を持って乗船しまとめるところはまだちょっと、そこまでのプログラムはできていないところですけども、例えば将来自分が航海士になりたいとかというような希望を持った生徒に関しては、実際の仕事がどうなのか、船員はどんなことをやっているのかというようなことを実際に目の当りにして、さらにその進路に向けて自分の意思を固めるというような状況にもなっております。逆に船酔いで仕方がない、私にはちょっとできないんだというような形での決断をする場にはなっているかなと思います。

【出張委員長】専門学科の高校と普通高校と違う大きなところが課題研究というのがあって、そこで非常に今国が進めようとしてるアクティブ・ラーニング的な学習というのはやりやすい環境であります、そのところを少し工夫していかなきゃいけないと思いますね。

ちょっと教育課程を見ても国際系には課題研究ないですもんね、完全な普通科みたいになってる。課題研究を履修できるんですか。

【山寺委員代理（鈴木副校長）】一応あります。一部にございます。

【出張委員長】どこに、総合のところに入れてるんですね。

【事務局】はい。

【出張委員長】国際系もやっていこうと思えばやれるような環境は整っているけれども、まだちょっとそのところが十分じゃないということでしょうか。

【山寺委員代理（鈴木副校長）】実際の取組としては例えばサイパンへの研修なんかもございますので、そこで向こうの国の様子を調べるとかというようなことをここでやっていると。

【出張委員長】その辺を生かして、こちらの気仙沼高校だと全国海洋教育サミットとかに出で発表したりしてますもんね。

【丹羽委員】全国海洋教育サミットは、大島海洋国際高校も一部参加してますよね。

【山寺委員代理（鈴木副校長）】あとは、水産系の高校の中でも生徒研究発表大会ですとか体験発表大会というのがございます。これは毎年出ております。また、春には日本水産学会がその高校生の発表会、まだちょっと余り本校では具体的に発表までいっておりませんが、実際に学会に出かけて行って一般の研究者の研究内容だけではなく、そういった高校生の様子を見ながらいつかは出たいということで進めているところです。

【出張委員長】本当にこれからの学習指導要領の改訂で探究学習になってきますから、それを先取りしたようなことを今やっているという状況が見えるのかなと思います。そのほか、

寮の宅習もやっておりますので、その辺の課題学習を学校の勉強と寮の勉強とのリンク、非常に御苦労されているんじゃないかと思えますけれども、それも進められるといいかなと思えます。

それでは、PTAの立場で、田島様から何か御意見いただければと思います。

【田島委員】ここにある興味に関する調査なんですけれども、これ多分昨年やったということで、多分私の子供が1年生のときにやったものじゃないかなとすごく今思い出したんですけれども。私も実際子供を入れた段に、やはり寄宿舎、それというのがすごく興味があって、また大島丸、船に乗れるというのがすごく興味があり、子供も海に関しては嫌いな方ではなかったというので、かなりこの高校に行きたいというのを本人の口から言ってきたということで、すごく自分で探してきたんじゃないかなというふうに思っています。

やはり実際のコンプライアンスも含めてなんですが、海洋系に関してはほぼいろいろなスポーツ、また大島ならではの部活動というのかなりあって、子供たちにとってはすごくいい面もかなりあるんじゃないかなというふうに思っております。また、大島丸の海洋実習に関しましても、今ちょうど今日校長先生も乗っていますけれども、継続的な運航ができる形であれば毎年毎年やっていってもいいんじゃないかなというふうに思います。それとあとは、ちょっと課題にも出たんですけれども、宅習活動、寮のほうで多分45分×3回やっているかと思うんですけれども、そこら辺がちょっと学校の方とうまく成績も含めてリンクできていないのかどうか、ちょっと私もよく分からないんですけれども、自分の子供しか分からないんですけれども、そういうところももう少し見直しができるかと思います。

あとは最後に、国際系というところで、国際系でもしも入ったらこういう道が開かれるというスタンスが見えれば保護者からでも、ああ、じゃあ私国際系へ行こうとか、海洋系に行こうとかそういう選択肢の一つにもなれるかと思えますので、そこら辺ははっきりした形で示していただければうれしいかなというふうに思います。

【出張委員長】望んで来てくれるというのは本当にありがたいなと、それだけ目標も明確になった学校なんですけど、若干今出ていたような、国際系ですかね、それから宅習のやり方とかその辺がどうなのかなというところもありますので、先ほどのほかの学校などの事例なども参考にしながら、子供たちのためにより良い教育ができるようにしていくのが大事かなと思っております。

あと、航海の方もせっかく船を持っていますから、そういうのは最大限に活用してやって

いくことが子供たちのためになるんじゃないかと思います。

ほかにご意見で、副校長先生、何かありますか、今のところまでで。校長先生からコメントか何か。

【山寺委員代理（鈴木副校長）】今校長がちょうど小笠原に入港したところまでございまして、コメントを預かってきておりますので、ちょっとここで読ませていただければと思います。

本校の在り方検討会を設置していただき、感謝申し上げます。これまでも検討を重ねてきており、特に船舶管理については課題は残っているものの、昨年と比べ大きく前進しております。これは都教育委員会の御理解と御支援の賜物と感謝申し上げます。

さて、本日私からは教育理念について1点申し上げたく存じます。現在の本校の学校像には「海を通して世界を知る」を掲げておりますが、教育理念にもそのことを色濃く反映させていきたいと考えております。

海洋における環境保護や海洋資源の継続的な利用に関しては、国連海洋法条約や海洋資源保全条約、生物多様性に関する条約等のように、我が国のみで対応できるものではありません。また、本日お配りいただいている資料2にもありますように、我が国が有している排他的経済水域は世界第6位の広さがあります。この我が国の持つ排他的経済水域のうち、東京都の伊豆諸島や小笠原諸島が占める海域はその約4割に当たります。この海域は我が国屈指の好漁場をもたらす水産資源はもとより、レアアースや地熱発電など新たな資源やエネルギー開発利用という大きな可能性も有しており、我が国の国益を維持する上で非常に重要な地域です。このことを正しく理解できる人材の育成が急務です。

そこで、海洋環境、海洋資源の保全と活用について関心を持ち、地球規模での課題に取り組む力の育成という趣旨の理念を加え、現在求められている海洋人材を育成する学校として教育活動を実施していきたいと考えております。この理念の下、教育課程を編成し、大島丸を活用していきたいと考えます。

本日は大島丸乗船中のため失礼させていただきますが、御協議のほどよろしく願いいたします。

ということでございます。よろしく願いいたします。

【出張委員長】副校長先生としては何か、せつかくですので、こういう機会。

【山寺委員代理（鈴木副校長）】今ちょうど海洋国際高校になったときに、今レアアース云々という話もございましたけれども、海洋政策と言いますか、今までの例えば水産資源と

かそういったことだけではなく、広く海からどんなものを持ってこられるのかというようなことを踏まえて、海洋政策とちょっと学校設定科目を設定したことがあるんですけども。ですので、今海洋人材といたしましては、単なる水産業の育成だけではなくて、そういった広く海というものを考えられるような人材というものを東京都としても輩出すべきなんじゃないか。そのために様々な実習であったり授業であったり、特に大島丸の活用というものがあるのかなと思っておりますので、その辺のところを勘案していただきまして御協議を進めていただければありがたいかなと思います。よろしく願いいたします。

【出張委員長】ありがとうございます。本当に四方を海に囲まれた島国ですから、日本の場合、そういう中で海洋教育の充実をしていきたいという御意見をいただいたのかなと思います。

それでは、行政側から。

【初宿副委員長】私の方から学校の先生とか保護者対象ということでちょっとお聞きしたいんですけども、課題として理念がはっきりしないということで漠然と理解はできるんですけども、例えば学校運営、子供たちにいろいろ教えている中で、この理念がはっきりしないがゆえの課題、先生方がお考えになる課題ってあるんじゃないかなと思いますが。そこを一つ二つでもご紹介いただければ。理念がはっきりしないがゆえにこういうところはやりにくいんだよとか、何か実感としてお感じになっている部分があると、今後の検討の中でより具体的に検討できるのかなと思うんですが。ちょっと問い掛けが非常に抽象的で申しわけないんですけども、どんなところを課題にお考えになっているのか御紹介いただければと思います。

【出張委員長】いいですか。

【山寺委員代理（鈴木副校長）】やはりどういう人材を育成すべきかということが学校としてもそこが一番決まらないところと言いますか、あくまでも国際的に対応できるような人材というものと、先ほどもちょっとお話があったんですけども、そこと水産系、寄宿舎生活だったり実習船教育だったり、どこまでを目標とするのかということが不十分なところがございます。船、大島丸一つとりまして、あれはあくまでも漁船のくくりでございまして、やはり将来的にそういう船に乗って活躍する人材を育成するために、まずは学校、陸上でそれなりの授業、実習をやった上で乗せるというのが一つの手順になっているかと思いません。それで将来航海士、船長になるような人材をというのが本来の実習船教育なわけでござ

いますけれども、それが航海士、船長を養成しないとすると、じゃあ実習船教育というものは実際どこまでやるべきなのか。

例えば余りいい例ではないかもしれませんが、大島南高校のときには海技士の免許、例えば4級海技士を一つの取得目標として授業、実習を進めていたところなんですけれども、そういう航海士、船長というものの目標がないとなった場合には、実習船でどこまで生徒に対して指導するのかというところが本当に学科改編当初というのは学校の方とそれから船の方といろいろやりとりをしてきたところでございます。やはり船の方といたしましては、自分が持っている技術というものを生徒の方に伝えたい、そのための実習船ではないかという考え方。ただそれが職業教育ではないとなった場合に、じゃああの大島丸をどう活用するのか。当初は小型船舶1級レベルでいいんだよというような話があったんですけれども、あれだけの経費が掛かる船をそんなような使い方かんかんがくがくでいいのかということに関しては侃侃諤諤の議論をしたところでございますけれども、それが今のところは余りはっきりしないところであるというようなところがありまして。

やはりどういう生徒をどこまでの生徒を育成する学校として位置付けるのかというのが学校現場としては、その次のステップとしてどういう教育課程で授業、実習でどこまでやるのかという一つの基準になっていくのかなというところで苦勞しているところでございます。

【出張委員長】 よろしいですか。

【初宿副委員長】 田島委員のお子様が希望されて入学していただいたということなんですが、実際はお子様がお考えになる進路、お考えになっているのがあるんじゃないかとは思いますが、そういった中で実際学校で過ごされて、何かお子様がお父様におっしゃるようなことの中で私どもの参考になるものがあれば是非教えていただきたいと思っておりますけれども、いかがでございましょうか。

【田島委員】 そうですね、早くから本人は独立したかったというのもありますので、それもあって選んだんじゃないかなというのもありますし。逆に、ドミトリの中では洗濯等も全て自分でやる形になりますから、責任というのも本人も早めについてくるなというのはいきなりいいことだなというふうに感じています。

中学校のときに関してですが、何をやるかというものはなかったんですけれども、ただ好きで今入っていて、卒業後は何をやりたいというのももう今は決まっている状態ですので、それに関しては本当に海系の方に行くので、すごく今回のこの高校に入ったことが本人の気

持ちを更に固めたものなのかなというふうに個人的にはちょっと思っています。

【初宿副委員長】最後に一ついいですか。

【出張委員長】どうぞ。

【初宿副委員長】大学側からということで丹羽委員から教えていただきたいんですけども、受け入れる側において今のお話を聞かれてどんなふうにお感じになったか教えていただければと思います。

【丹羽委員】もちろん私も海洋系の大学教員なので、やはり一人でも多くの生徒さんに海洋系の大学に来てほしいというのは当然あります。そんなときやはり大島海洋国際高校で実際に船に乗って、大島丸に乗船して、そういう意味ではせっかくここに入ったのに海洋以外の大学に行くというのはすごく残念だなというのは正直思います。

そういうとてもいい生徒さんが大島海洋国際高校に入っていますので、大学としてはもっと協力して、例えばさっき言った課題研究とかそういうところに大学としても協力してやっていきたいと思っていて、そういうときにやはり大島丸が定期的に、一番のメリットは定期的に例えば沖ノ鳥島なり決まった場所に毎年決まった時期に行くというのは研究としても非常に継続してデータがとれるというのは非常に魅力的ですので、是非そういうところはしっかりと継続的に実習をしていただいて、そこで大学としても課題研究とかそういうところで協力できればいいなというふうに考えております。それが生徒さんが海洋に興味を持ってもらえる契機となって進路を決める際に海洋系のところに生徒が一人でも増えると私たちとしては非常にうれしいと思っています。

【初宿副委員長】ありがとうございました。すみません。

【出張委員長】よろしいですか。いいですよ、いろいろな意見を出していただいて。

ほかにどうですか。余り時間もなくなってきちゃったんですけども。少しありますか。

【増渕委員】ではちょっと教えていただきたいんですけども、入学の段階は全部一緒ですよ。国際系と海洋系に行くときに、海洋系は比較的目的意識というか明確な感じはするんですけども、国際系に行くか、海洋系に行くか、迷っている生徒にどのような指導をしているのでしょうか。各々の人数のバランスがとれているようなので、1年生から2年に行くところの指導の状況というのを教えていただければと思いますけれども。

【山寺委員代理（鈴木副校長）】類型の選択に関して、ちょうど今ぐらいが選択の時期になっております。1学年が80名ですので、大体半々ぐらいというのが理想です。もちろん先ほ

どデータ見ていただいたように、年によって変わります。本当にいっせいのせでポンと切ったときに半分半分になる年もあれば、今年は実は80名中60名が海洋系を選んでおります。ですから、そういったことに関しましては生徒の将来の進路希望であったり、そういったものを勘案しながら、まずは担任との面接をしております。それでもなかなか減らない場合には、本当に悲しいところがございますけれども、最終的には成績、海洋に関する科目であったりそういったものの成績等で線引きをするところがございます。

あとは、国際系に関しましてはと言いますか、以前様々な今までの教育課程の変遷がございましたけれども、以前はどちらかというと海洋系が理科系の学習内容で、国際系はどちらかというと文科系の学習内容というところございましたけれども、それでは例えば海洋系に行けなかった、理科系に進みたいのに無理やり文科系になってしまうというところに大きな課題がございましたので、現状といたしましては国際系に進まれた生徒さんでも文科系、理科系の学習内容が勉強できるようなカリキュラムにはなっております。ですので、先ほど国際系でも海洋系の大学に行く生徒さんがいるというのはそういったところもございます。ですので、基本的には類型の選択に関してはそんな状況でやっております。

【増淵委員】そうすると、ちょっと確認なんですけれども、許容できる範囲をこえて人数がアンバランスになったときには、ちょっとこっちにという、そういう形で調整をしているということですか。

【山寺委員代理（鈴木副校長）】はい。特に大島丸は定員がございますので、それから運用面でもある程度人数の制約というのは出てしまうのかなと。

【出張委員長】一般的にですから工業高校とかなども最初のところで総合技術科でとって、途中でコースに分かれていきますから、そういう課題はどうしても、定員の枠があるから、生まれてきちゃうんですね。最初から学科でとってる、それが特色ある都立高校の一つにしていますから。ただ、海洋国際の場合はくくりで80人として、それで2年生で分かれていくというところで若干の調整が出ちゃってるということがあるんですね。

江藤委員、いかがですか。

【江藤委員】まだよく理解できていない部分があるんですけども、どうも今日のお話を伺っていると、国際系のほうがカリキュラムとか、要するに先ほどから出ています生徒の将来のキャリア像が見えにくくて、国際系の部分における大島丸を活用した乗船実習の在り方、そういうものをどういう位置付けにしていくのか。伺っていると、海洋系のほうは何か道筋

が見えているんだけど、国際系のほうがどうも見えにくいというような理解でよろしいんでしょうか。

【出張委員長】先ほど最初のところで事務局からも説明があった、教育理念のところは明確にしていきたいということだと思うんですね。進路などを見ていると、海洋系のほうは選んだところに進んでいますが、国際系のほうが目指すキャリアが何なのかというのが明確でないために十分に生かすことができていないんじゃないか、じゃあどうしたらいいかというところを今後、江藤委員も言っているところを、これから詰めていく形になるんだと思います。

いいですか、事務局。

【事務局】事務局ですけども。恐れずに言えば、江藤部長のおっしゃるとおり、海洋系についてはキャリア像を明確にしようと思えばできる、求められる人材像というのはあるんだと思います。一方で、国際系になると、海洋の内容、教科「水産」の内容を学ばずに実習に出たりするわけで、課題研究も普通教科の教員でやる課題研究ですので、水産の課題研究とは全く違います。そういうことを考えると、何のために国際系の大島海洋国際高校に来て国際を学ぶのかということについては非常に不明確。これをそのまま継続していいものなのかどうかということについては明確にして議論をしていきたいというふうに思っています。

【出張委員長】ほかによろしいですか。ちょっと時間の関係もありますので、非常にまだまだ議論これから煮詰めていく関係ありますが。本日はここまでとさせていただきたいと思います。

本日いただきました御意見を基に、事務局でまとめまして、次回それについて説明をして、また深めていければと思っておりますので、事務局の方で次回の準備をお願いしたいなと思っております。

議事はこれで終了で、次第の4、その他、これは事務局から何か連絡があるんですか。

【事務局】次回の予定なんですけれども、まだ日程調整中ですが、12月中下旬に第2回を行いまして、本日の議論を踏まえまして方向性を提案をさせていただきたいというふうに思います。

連絡は以上です。

【出張委員長】今事務局から説明がありましたが、非常にタイトで、今11月中下旬になっていますが、12月中にもう1回委員会をやるということでございますので、これから多分事務局のほうから日程調整が入ると思いますので、非常に年末ということでお忙しいんじゃない

いかと思いますが、是非御都合つけていただいて、御出席いただければなと思っており  
ますので、どうぞよろしく願いいたします。

それでは、第1回の検討委員会をこれで終了させていただきます。本日は御協力ありが  
とうございました。